「イエス・キリストは主」

フィリピの信徒への手紙２章６－１１節
イザヤ書５２章

主イエスの苦難の日々を思いながら受難節を過ごしている私の脳裏をよぎるもの、それは遠藤周作の小説『沈黙』と、ベトナム戦争下のアメリカで盛んに論議されていたテーマ「神の死」です。どちらも、正視出来ないほどの酷い状況の中で、なおも続く神の沈黙を問い、神の不在を問うものです。それは今日のロシアのウクライナ侵攻やミャンマーの内戦が長期化している中で、私たちの思いの中にも見出せる問いです。今日与えられた聖書は、その問いと非常に深く関わっています。

今日の聖書イザヤ書５２章の後半から５３章は「苦難の僕」と呼ばれる非常に有名な箇所で、神の沈黙について書かれています。５３：７には「苦役を課せられて、かがみ込み　彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように　毛を切る者の前に物を言わない羊のように　彼は口を開かなかった。」とあって、ここにも＜神の沈黙＞が見えます。しかし聖書を注意深く読んでいくと、沈黙を通して神が働いておられることが分かるのです。

５３：６には「わたしたちは羊の群れ　道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて　主は彼に負わせられた。」とあり、５３：１０には「病に苦しむこの人を打ち砕こうと主は望まれ彼は自らを償いの献げ物とした。・・・主の望まれることは　彼の手によって成し遂げられる。」とあります。つまり、＜沈黙＞には神の動きがないように見えますが、実はそこにも神の存在・働きがあることをこの言葉は示しています。

このイザヤ書の４０－５５章は第二イザヤ書と呼ばれていますが、「苦難の僕」の詩が詠まれたのは紀元前６世紀、イスラエルが捕囚であった時代でした。日本で言えば敗戦後の占領下の状況です。戦後生まれで戦争に関しては両親から聞く程度の知識しかなかった私が驚いたのは、横井正一さんのグアム島からの帰還でした。天皇を＜現人神＞と信じ、必ずやとの思いで戦った兵士の一人だったのです。戦後の日本では、聖書の中のイスラエルと違って神について問うということはありませんでしたが、イスラエルの民は神を激しく問い、神は死んだ、沈黙してしまったと考えたのでした。しかしそのような中、第二イザヤの言葉は、５３：１に「わたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。」とあるように、神の働きについて語って行くのです。

ところで、今も昔も人間は神の働き・宗教の威力をどんなところに感じているのでしょうか。莫大な財産、豪華絢爛の祭壇、強大な建造物、あるいは政治への影響力などの中にそれを見つける人もいるにちがいありません。しかし今日の箇所を読むと、第二イザヤの中で言われていることや主イエスの言葉、キリスト教会の本来の在り方などすべてに於いては、そういう見方をしていないことが分かります。むしろ「苦難の僕」にある神の苦難と死と献身、つまり＜十字架の姿の中に＞宗教の威力を見ていると思われるのです。

５３：２・３には「この人は・・・見るべき面影はなく　輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ　多くの痛みを負い、病を知っている。」とあって、古代イスラエルのダビデらにあった容姿の美しさは奪われ、まさに苦悩の人、孤独の人の姿としてあるだけです。５３：７の「苦役を課せられて・・・」は忍耐ということで、行動・言葉に於いて全く罪がないにもかかわらず「主の僕」は口を開かなかったのです。聖書はこうした運命・状況を味わった方であるがゆえに、初めて人間の不条理をそのまま受け止めることが出来るのであり、それこそが主の僕であると語っています。そして５３：９ではその不条理を嘗め尽くした主の僕の全生涯をまとめ、５３：１２では「…多くの人の過ちを担い　背いた者のために執り成しをしたのは　この人であった。」と続いています。主イエスの十字架は、神の沈黙の中で主の僕である彼が受け止めた献身によって成り立っているのであり、それによって＜人間の救い＞は成立したのです。

Ｉコリント１：１８に「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては、愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」とあります。あの十字架の出来事を言葉化し、人々に伝えなければならないという思いが溢れています。聖書は、十字架上で理由のない苦しみを受けられた主イエスこそ、神の言葉そのものであると語っているのです。

今、神の沈黙が世界を覆っている感があります。しかし私たちは、神の最大の沈黙によって私たち人間の救いが成し遂げられたのであったことを理解しなければなりません。主イエスが神の沈黙の只中におられた、そのことによって、教会もキリスト者も今この時を耐え抜いて行くことが出来るのです。

（説教要約　羽入田悦子）